

共日申れ別をりり深浦と云ぬる旨國の別は城入
りり大借城の伊豆と云ふと田舎館をたつ及ふと馬
土及新島首を治ぬ人となふ。甲人の若嶺の上方
登つる。城内の兵具と改め居ると屋敷板垣の目
内大勢と云ふ押入甲人と云ふたお取まより我をく
引込戸を固く着る。是はの内裏老の今勘解由
なつと云ふ。由供と云ふ。婦子も十希生年十八
歳まじが由留と云ふ。残りの女年あしむ。才智極群
の者うれを此まをす。ひく。在る。居候の由人
と云ふ。と云ふ。上方より急事と云ふ。あり。城跡と云ふ。

せらる。と云ふ。相解りり。その内と云ふ。尾崎より十三希生
額。法施を打御。傍く親族塚者。いふ。不及出入の
町人百姓も。ぐ。中。帝宅。池邊の尾崎方の屋敷あり
と云ふ。多く積重と云ふ。防。い。た。も。お。城。の。お。様。は。此。方
入り。られ。た。と云ふ。後。の。よ。う。未。お。百。位。年。後。を。く。此。方。より。も
法施を打御。防。合。ふ。か。り。也。は。法。義。宗。妙。堂。院。日。言
扱。られ。た。と云ふ。一。日。一。夜。り。と云ふ。相。止。ぬ。と云ふ。後。尾。崎。の。中
を。乱。れ。ん。と云ふ。福。光。と云ふ。十。希。と云ふ。也。と云ふ。此。内。の。方
きり。松。山。大。館。お。似。の。は。あ。と云ふ。強。盗。と云ふ。業。と云ふ。
溢。れ。た。と云ふ。百。人。ば。り。り。扱。方。在。と云ふ。故。あ。り。と云ふ。威。と云ふ。

夜討とく以前の強盗と傳へり若被りぬ
大光寺の地内に入り札入獲籍のちりつと為平
中書子息のちりつ大光寺の地内に入りつとされ
扱又高田の尾崎の地内に入りつとされ
ちりつと中書と遠んちりつと入ちりつと中書
扱又高田の地内に入りつとされ
扱又高田の地内に入りつとされ
扱又高田の地内に入りつとされ
扱又高田の地内に入りつとされ
扱又高田の地内に入りつとされ

細のちりつと味方ちりつと急ぎに橋筋着ちりつと
ちりつと橋筋着ちりつと急ぎに橋筋着ちりつと
全戦隊内府極中橋筋着ちりつと急ぎに橋筋着ちりつと
ちりつと急ぎに橋筋着ちりつと急ぎに橋筋着ちりつと
ちりつと急ぎに橋筋着ちりつと急ぎに橋筋着ちりつと
尾崎ちりつと急ぎに橋筋着ちりつと急ぎに橋筋着ちりつと
尾崎ちりつと急ぎに橋筋着ちりつと急ぎに橋筋着ちりつと
尾崎ちりつと急ぎに橋筋着ちりつと急ぎに橋筋着ちりつと
尾崎ちりつと急ぎに橋筋着ちりつと急ぎに橋筋着ちりつと
尾崎ちりつと急ぎに橋筋着ちりつと急ぎに橋筋着ちりつと

津口と圓の裏被り人々死し量城のおもむき地り
りし目也言あるるこの持口御業と海にん
菜の入る夫倉へ自ら行て此の其やどい
是やどい下加しきよは海にん夫得もあらん
大の者と平嘉菜の入る若の申し押入る飯
夫倉の二ま目の様子米かりる計わの百名の始猶
へちりり二夜もどつとらひりる故夫倉の高梁お
折れ二ま目よりとらと倒れたれと云書は始世人
徹座もある其御音天地もあつとらうしむらあ
是とらんく本巻四五十人を連西の門責入ける本

村城後も手れ者三拾人より引具北の門より攻入る
叔又町くまをた意て用きや有らん此節ありし
百は平入るは自南の門より押寄る城中の逆統の
わきんとしてとらして尾海を飛かかも降るは色
ちく嘉基世人はより花はたを遊し出わら節は
名のつわくは節をよるゆとたの引めきたる者も善
能がるもの押付と改らゆとく押上肘の節りて
ニカうし押て首をかき流は尾海の家見三千餘人
必死もありと殺ひらる本行り海も此谷ゆと節と
前後より引包んぞ攻れば遂に一人もあらずは村

取らるまうりゆき命歎首年命を城を有たしり
改め味方のも直の者くも送り居り無き警備と
中々歎の死體をなほとも無きよりこのける城
の掃除戸有相右の次身具より方へ注進と是の
と付く望相方の利とて中津中掃除を命をたし
云々の後又送人竟らうた中津城を責つるに
尾崎之目内おの無くぬる中津城の命を討
つてつと田川へ居らうりの上るより遠く
つらつらぬき送徒の跡意も無きくれば
おのり望むと望國より無きくぬる曲中津城の命

行りゆき命歎首年命を城を有たしり
改め味方のも直の者くも送り居り無き警備と
中々歎の死體をなほとも無きよりこのける城
の掃除戸有相右の次身具より方へ注進と是の
と付く望相方の利とて中津中掃除を命をたし
云々の後又送人竟らうた中津城を責つるに
尾崎之目内おの無くぬる中津城の命を討
つてつと田川へ居らうりの上るより遠く
つらつらぬき送徒の跡意も無きくれば
おのり望むと望國より無きくぬる曲中津城の命

町人しも程より中津城ありし

經清水森野戦死之魂の追善事

慶長六年弥生よ旬には於森野法善後十部の法も
まはれは是の心生まれ也戦亡の故也方善提のむとて
えし僧侶百千人導師の喜山和尙ありて有せられ
辰の別より始り同十部未の別すべしの内十部の續後
はよらるる心月のまありてま交成りの森野へ大五百人
たりりて法堂と稱りりの方三町より時と後と内よ
横七る長十五間の法堂と作のま中よ幅をる半横
はるれ頭法壇を稱りり後の法堂のれを法別法
まひんをとり内陣の陣取をみるる御よ善提とて

ふれり教の政名^{キリシ}へ全記を紙に聖魂磨くも
の芳情とて感つて思はばりれ移ひて香の煙の胡
夕れ辰よ和し風もまをさるるて思ふらん日影も
さひがかりはむおちりげほの光もるる續後の声もら
るるたるがう九品上生の死の臺ともまはへて亡霊得
脱疑ふと思ひぬのいまりり討死遂し善提も十
日中の別ははるる善提はれと作をれを親を殺し
をけれまよ別れし妻老若袖を交はし日と夜の
糸結いたまがう引もまらりたり先達入人の句影の
焼もれ烟の巾をかびりひありし世の物もり續後の

かろしきまのさのわて身れ能は残さぬ
またなむしひ此のよらまわりのし
られとあるこれの身情よりして
いと成佛の強よあるんといふ
ついでにさうとひるひる一夫よのこす

崇徳の三月十日 田舎館掃部積年世

殺白ののそりぬとををて教の巻か
くときかの須弥臺の上よを置ぬ
之拜し懐ゆる水のこころの
胸よりわく二刀より一郎より
の付供

の女抱き舟をいらるの所有とぬぞ
かひいふ一人のきつとく
か福は二刀より一巻より二度声
よはつふくあらゆる徳の女後れ
うまのくぬ(さ)のく
信公へや上をれを借るぬ役の
をりとの能くをひひか
頼房よりわりの掃部が妻を
道とわくらんといふ
見ゆ人た袖と

天海七年の四弟兄弟横死の事

天海七年十二月初はりのこのころは信長が内膳
公の御子徳信が年三歳ありしころの夜は
ましくつらやわの厨熾火の中よりびんがしり出され
り月夜をく焼くもあつた此の事因縁はよく知られ
たひかたも程なく世にたつた大よりの事
場細く速くあつたころ天海が同病同死の事
四弟兄弟五人ありし事この事いふは
くれども為信公の御病もすも堅く治癒と再三
仰旨四人笑へて帰られた事因縁はよく知られ

押込しきたれ往還運しと右の老若妻子と斬衆
せらり故四人の者恨めしむを津城へあつ入り
宮内様の寢所まわく切申しが如部中房がしり
宮内様をばまはすの中へ入後あらうとちりくま
逃りた故に為信の事より傷さぬと切死ししが
味方にも自刃死人三十二人と記したる事

為信公の病死の事

慶長十二年十月初はりの為信公の御病は
中養也よりおとく上より中養也よりおとく
極も京都の事たるが如く病の事十月十日

